

〔巻頭言〕

マレーシア入植村のめぐり合い

平戸 幹夫（拓殖大学）

今、ジュンカ地域の入植村から KL に戻って入植村が縁で出会った人たちのことに想いを巡らせています。調査対象というより私の人生そのものを彩る人間模様があります。今回はマレーシア北部大学のノール・アルフダ(Noor al-Huda)先生（上級講師）と大学院生 2 人の 4 人で 1 週間インドネシア人労働者について調査しました。インドネシア人労働者については近く報告をまとめたいと思っています。

私が初めてマレーシアに行ったのは 1973 年のことです。マレーシア入植村との出会いは偶然から始まりました。1973 年に東京倶楽部の海外学術調査の研究助成を受けて、そのときのテーマは「アジアの農村と農業に関する調査研究」ということで、東南アジアの農村について調査することになっていました。そのときに、じつは私はフィリピンの農村を調べるということについて計画していました。現地に出向く前になって助成を担当している役員の方から「フィリピンはやめてくれ」という連絡がありました。ちょうどマルコスの刀狩りが行われて安全になってきたと言われていました。しかし出先でなにが起こるかわからない、研究助成を受けて出て行った人が事故に遭って死んでしまったなんていうことになるとう担当者としても困るという話でした。東南アジアはいいけれども、安全なところにして欲しいという注文でした。急きょ、どこが安全だろうと思ひまして、「シンガポールは安全だ」と言われても、私が当時考えていた目的には合いません。しかたなくマレーシアということになりました。マレーシアだったら安全だということです。私がすでに若干は勉強していたこともあってマレーシアの入植村についてやるということになりました。

当時は FLDA と略称していましたが、現在は Felda と略称している連邦土地開発公社の土地開発、入植の事業全体と入植村について調べるということを考えました。KL の Felda 本部や入植村に出向いていろいろ話を聞いたり資料を集めたりするというようなことをやりました。

(1)Tengku Shamsul Bahrin 先生との出会い

文部省のアジア諸国派遣のプログラム（1976 年 3 月 26 日～78 年 3 月 31 日）に合格してマレーシアに行きました。大学に所属するのが一般的なのでマラヤ大学に所属して農村を見て回ることになりました。このときは、グダンサヤスンガ

イトウンギ、マレー半島のまん中のあたりにジュンカ三角地帯という大きな Felda 入植地がありますが、そこにも出向きました。この留学でマラヤ大学のシャムスル・バハリン先生に指導をお願いしました。彼は FELDA と土地開発、入植についての研究をしていました。FELDA の発展過程と現状をまとめた 21 年、30 年、50 年の歴史を総括的に扱った 3 冊の本の執筆の中心となった人です。今はマラヤ大学を引退してニライカレッジの学長です。私が初めてジュンカを訪問したのもシャムスル・バハリン先生と一緒にでした。彼はマレー人には珍しくお酒を嗜む方でお酒でも何回かご一緒しました。息子も交えてのこともありました。ニライカレッジはツイニングプログラムに取り組んでいるところです。私の息子も将来アメリカに留学したいと思っていたので、このプログラムを利用することを相談しました。結局私のコンドミニアムから通えるスパンにあるカレッジを選んで、そこからアメリカの大学にトランスファーしました。1997年のアジア通貨危機では、マレーシアもひじょうに強い影響を受けました。マレーシアの通貨の価値が下がり、外国生活の経費が上がってイギリスやアメリカで勉強することが難しくなりました。そういうことで、できるだけたくさんマレーシアで単位を取っておく。相手方の先生が出向いて、出張講義といいたまいますか、たくさんの科目を揃えてあるので、できるだけたくさん単位をとるようにする。アメリカのシステムですと、デグリーを与える大学で 50 単位は取らないといけないという制約がありますから、だいたい 70 単位ぐらい取っておく。50 単位ですと 3～4 セメスターぐらいでなんとかできますから、それで 1 年半から 2 年間ですみます。そうすると、費用的には安くすむ。私のような経済状態でも息子をアメリカでもイギリスでもやることができるというわけです。そういうふうに、「ミイラとりがミイラになる」と言いたまいますか、調査対象だったはずのマレーシアに私自身が取り込まれてしまいました。

(2)Nordin Lakim さんとの出会い

1973 年にカンボン・スハルト(Kampung Soeharto)という入植村に行って、村人の何人かと親しくなりました。その中にノルディンさんがいました。彼はやがて私にとってもっとも信頼できるインフォーマントになりました。彼とは一緒に農作業もし、彼が釣り好きなので私も一緒に森林の川釣りをしました。網を張って海老を獲ったりもしました。彼は生きた海老を私に進呈してそのまま食べるように勧めてくれました。彼は日本人が猫のように生きた魚を食するところを見たかったのです。私が日本に帰っていたときのことですが、彼は一人で釣りに出かけて落雷に遭って命を落としました。彼が突然の事故で亡くなって彼の存在は私にとっては単なるインフォーマントではなくて私が人生と世界を見る上での私のもうひとつの目であったことに気づきました。彼が亡くなってからは何か恐ろし

くて現実を認めたくなくてその入植村から足が遠のきました。しかし意を決して息子と一緒に久しぶりに村を訪れました。ノルディンさんへの弔意を表すためというより、私の気持ちに区切りをつけるためでした。ノルディンさんの家はほとんど変わっていなかったし、奥さんの様子も以前と一緒に、子どもずいぶん大きくなっていました。

(3)Noor al-Huda さんとの出会い

トロラッにある FELDA 研究所に滞在した折に、公刊されていない入植村についての研究を見ていて学生の卒論にも優れた実態調査があることに気づきました。その中の国際イスラム大学のノール・アルフダさんのものと遭遇しました。私の大学が国際イスラム大学と交流しようという話もあって、彼女を日本政府奨学金留学生に推薦することになりました。幸い彼女は優秀な成績で政府留学生に採用されました。私が大学院で指導担当教員になって論文指導をすることができました。今取り組んでいる入植村調査を手伝ってもらっているのも彼女の入植村に関する報告を偶々私が目にしたこと始まる入植村の縁です。

(4)Mohd Shah Ali さんとの出会い

Felda の職員の中でもシャー・アリさんとは特別に親しくなりました。今は本部で人材開発局長を務めていますが長年ジュンカ地区の責任者をやっていて私の指導した日本人の大学院生がジュンカで調査したときもお世話になりました。息子と一緒にアンパンのお宅を訪問したり、またシャーさん一家がしばらく日本の拙宅に滞在したこともあります。今回のジュンカ調査でもお世話になりました。この出会いも入植村が取り結んだものです。

(5)フィールドワークについて 観察者か参加者か

フィールドワーカーには四つのタイプがあるそうです。一つは「完全なる観察者」。その対極にあるのが対象地域におけるメンバーそのものであるという意味での「完全なる参加者」。その中間に二つのタイプがあって、「完全なる観察者」寄りだけれども参加者に近い「参加を伴う観察者」というタイプ。もう一つが「完全なる参加者」に近い「観察を伴う参加者」ということです。私は入植村の調査を始めた時は純然たる観察者だったと思います。しかしノルディンさんと親しくなるにつれて参加者に近づいていったようです。彼には、「おまえもイスラム教徒になれ」とさんざん勧められました。ラマダンのときに彼のところにずいぶん長く滞在したことがありまして、私だけ食事をしてずるいと言われて、「私はムスリムじゃないし、イスラム教徒にならないけれども、ラマダン付き合う」といつて付き合ったりしたこともあります。それぐらい親しく付き合った人なんですが、その人が落雷で亡くなったのは私にとってショックだったですし、いつでも私はそこに行けば、村の中にとけ込むことができたのが、ぷつぷつ糸が切れてしまい

ました。まったく距離がなく付き合っていた人が消えてしまったということで、一つの大きな転機が訪れたような気持ちになりました。それまでと違って、現地の人々にそんなに入り込まないで情報だけもらおうというような付き合いに、どうもそのあとになってきてしまったように思います。私たちフィールドワークをする者にとって対象とどんな関係を取り結ぶのか必ずしも意のままにはならない重いテーマだと思います。